かしこいお手伝いの娘　　リトアニア

昔むかし、あるところに、若い領主がいました。領主の屋敷に、お手伝いの娘がひとりありました。娘はとても美しく、領主はこの娘と結婚したいと思いました。けれども、お手伝いなんかを妻にするのは恥ずかしいことだと考えました。そこで、むしろ、娘を追いはらってしまうのがいいと思いました。そうでないと、いつも娘のことばかり考えてしまうからです。

あるとき、領主は、娘のお父さんを呼んでいいました。

「ここにたまごがあるが、おまえの娘に、これをひなにかえすようにいってくれ。もしやらなければ命はない」

お父さんは、たまごを持って帰ると、娘に渡していいました。

「領主さまが、これをひなにかえすようにとおっしゃったんだよ。さもなければ命はないと」

娘がたまごを見ると、ゆでてありました。

「まあ、ゆでたまごをひなにかえせだなんて、領主さまって、ちょっと変わってるんじゃない？」

娘は、すぐに、大麦を大なべでいって布で包み、お父さんに渡しました。そして、

「この大麦を領主さまに持って行ってくださいな。そして、畑にまくように伝えてください。大麦が実ったら、ひなの餌にするからって」といいました。

お父さんは、大麦を領主のところに持っていきました。

「娘が、これを、旦那さまにまいてもらうようにと申しました。大麦が実ったら、ひながかえったときの餌になるでしょうと」

領主が大麦を見ると、いってありました。

「いった大麦が実るだなんて、おまえの娘は、ちょっと変わってるんじゃないか？」

「娘はこう申しました。『ゆでたまごをひなにかえせだなんて、領主さまって、ちょっと変わってるんじゃない？』」

領主は、

「なるほど。おまえの娘がそんなにかしこいなら、娘に、石の皮をはぐようにいってくれ。さもなければ打ち首にするぞ」といいました。

お父さんは、家に帰って、娘にいいました。
「領主さまが、おまえに、石の皮をはぐようにとおっしゃったんだよ。できなければ、打ち首にすると」
「まあ、石に皮があるだなんて、領主さまって、ちょっと変わってるんじゃない？」
娘はお父さんにいいました。
「領主さまの所に行って、石のくるぶしはどこにあるか教えてもらってくださいな。石の皮はかかとからはがなくてはなりませんからって」
お父さんは、領主のところに行って、娘のいったとおりに話しました。領主は、
「石にかかとがあるだなんて、おまえの娘は、ちょっと変わってるんじゃないか？」といいました。お父さんは、いいました。
「娘はこう申しました。『石に皮があるだなんて、領主さまって、ちょっと変わってるんじゃない？』」
領主は、お父さんにいいました。
「家に帰ったら、娘に、わたしの所に来るようにいいなさい。歩いてでもなく馬にも乗らずに、はだかでもなく服も着ないで、街道も小道も通らずに、贈り物を持ってきてもいけないし、持ってこなくてもいけない。このとおりにできたら、結婚しよう。できなければ、娘は死ななければならん」
お父さんは、家に帰って、娘にいいました。
「領主さまが、おまえにお屋敷に来るようにとおっしゃったんだ。歩いてでもなく馬にも乗らずに、はだかでもなく服も着ないで、街道も小道も通らずに、贈り物を持ってきてもいけないし、持ってこなくてもいけないと」
娘は、ひとつがいのはとをつかまえました。そして、網にくるまって、やぎに乗って、畑や溝を横切って行きました。歩いてでもなく馬にも乗らずに、はだかでもなく服も着ないで、街道も小道も通らずに、屋敷に着きました。そして、領主にあいさつすると、贈り物のはとを放しました。はとは、どこかへ飛んで行ってしまいました。
こうして、領主は、娘をやりこめることができなかったので、娘と結婚しなくてはなりませんでした。
結婚のお祝いが、盛大に行われました。
領主は、お客たちのテーブルに、一メートルもある長いスプーンを出しました。お客

たちは、スプーンの柄のはしを持って食べなければなりません。お客たちが、ごちそうが口に届かなくて困っているのを見て、領主は大笑いしました。すると、娘が、
「あなたたち、お互いにごちそうを食べさせればいいのよ」といいました。領主はかんかんに怒りました。
「これから先、わたしの仕事に口を出したり、もめ事をおさめたりしたら、おまえをここから追い出すぞ」
あるとき、領主が、用があって町へ出かけました。その留守の間のことです。屋敷に、ユダヤ人とリトアニア人がやってきて、けんかの仲裁をしてくれといいました。ふたりは、いっしょに年の市に行ったのですが、そのとき、ユダヤ人は馬車に乗っていき、リトアニア人は、馬を一頭引いていきました。とちゅう、ある村で一晩泊りました。その晩、リトアニア人の馬が子馬を生みました。朝起きてみると、子馬は馬車の下で寝ていました。そこで、ユダヤ人が、
「ああ、わしの馬車が子馬を生んだぞ」といいました。リトアニア人は、
「なんだと。子馬を生んだのはわしの馬だ」といいました。ふたりはいい争いになって、領主に仲裁してもらおうと、屋敷にやって来たのです。
領主の妻は、ふたりの話を聞くと、いいました。
「あのねえ、去年、川岸の畑にキャベツを植えたら、夜のうちに、カワカマスが水から上がってきて、わたしのキャベツをみんな食べてしまったのよ」
すると、ユダヤ人が驚いて、
「奥さま、カワカマスが水から上がってキャベツを食べるなんてことがありますか！」
と、大きな声でいいました。
「どうして？馬車が子馬を生むくらいだから、カワカマスが水から出てきてキャベツを食べてもおかしくないでしょう」
ユダヤ人が、だまってしまうと、領主の妻はいいました。
「リトアニアの人は、馬を走らせて帰りなさい。ユダヤの人は、馬車を走らせて帰りなさい。子馬がついて行ったほうが、子馬の持ち主です」
もちろん、子馬は母馬の後について行きました。
やがて、領主が、帰ってきました。領主は、妻が争いごとをおさめたことを知りました。そこで、

「おまえは、わたしの仕事に口を出した。だから、もうわたしたちは、いっしょにはいられない。この屋敷のなかでおまえの一番好きなものを持って、どこへでも行ってしまえ」といいました。

妻が出ていく前に、領主は盛大なお別れパーティーを開きました。飲み物も食べ物もたっぷりありました。領主がよっぱらって寝てしまうと、妻は、領主を馬車に乗せ、お父さんの小さな家につれて帰りました。そして、ひとたばのわらを広げて、領主を寝かせ、自分もそのとなりに横になりました。

夜が明けると、領主は目を覚まして、あたりを見まわしました。

「ここはどこだ」

「わたしのうちよ。わたしたちはお別れしました。あなたは、わたしに、一番好きなものを持って行けとおっしゃいました。それで、わたしは、あなたをいただくことにして、出てきたんです」

領主はいいました。

「さあ、急いで屋敷に帰ろう。せめてだれにも見つからないうちに」

それから、ふたりは、ずっと仲良く暮らしましたとさ。

おしまい

村上郁再話

資料『世界の民話33リトアニア』鬼頭恵美子訳／ぎょうせい